



発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

家庭は教会

中村 満

長崎教区司祭

教皇庁・家庭評議会主催の第四回「世界家庭大会」が、去る1月、フイリピンのマニラで「キリスト者の家庭―第三千年期のための良い知らせ」をテーマに開催されました。それは、第三千年期を「アジアにおいてイエスの名と福音を告げ知らせる千年期」と位置づけ、この千年期はアジアにおける福音宣教に力を入れたいという教皇の意向を示すため、また、一緒に集まり、祈り、対話し、学び、分かち合いながら、キリスト者の家庭が福音宣教の基本単位である「家庭教会(Ecclesia domestica)」としての役割をどのように果たしたらいいか、についての理解と評価を深めるために開かれたとのこと。大会には神学・司牧会議(約3日

間)も盛り込まれていましたが、会議内容については専門家に譲るとして、ここでは、大会を通じて私が考えさせられたいくつかの点について述べさせていただくことにいたします。

家庭の危機の温度差

大会の開催国は教皇自ら指定し、大会テーマも自選された、ところがいました。キリスト者の家庭こそが社会の中では福音そのものであり、福音そのものにならなければならぬ、すなわち、福音宣教の担い手は家庭である、という教皇の考えを世界中に浸透させるための大会にしたいとの願いを込めて、準備がなされ

てきたとのこと。当初は大会ミサも教皇が主司式なると予定だったが、と聞きました。

会議の中では、「家庭は今、現代社会の中であって、さまざまに危険にさらされ、本来の姿を喪失し、崩壊の危機に瀕している」「家庭の崩壊はやがて教会の崩壊、社会の崩壊に繋がっていく」「今こそ家庭の再興に努めるべきである」という主旨の発題が多くなされました。

教皇の熱意、会議中の発題者の熱弁、会場の熱気などを肌で感じながら、家庭が置かれている状況への理解、その使命の重要性についての認識などについては、国によってかなりの温度差があるということ、自戒の意味も込めながら実感させられました。

「家庭教会」

現教皇の使徒的勧告「家庭―愛といのちのきずな」が発布されてからすでに20数年が経っています。長崎教区では、教皇がその中で強調されている「家庭教会」ということばそのものもまた十分には知られていないように思います。

世界各国からの発題者夫婦は約20組にも及びましたが、どの発題者も、それぞれの国の状況の中で、キリスト者の家庭として自分たちがい

かに生きていくべきかを興味深く語ってくれました。その中で多用されていたのが「家庭教会」ということばでした。「教会の中にキリストがいるように、家庭の中にもキリストがいる、またそのようになるべきである」という発言や、異なる民族、宗教、社会、さまざまな境遇の中で自分たちがどのように生きていくかという信仰の生の証言などを聞くことによって、家庭教会の意義、その使命と役割を再確認させていただきました。会場を埋め尽くした5千人の参加者たちには、家庭教会についての「共感、共有」を得るまたとない機会が与えられたと思います。

夫婦・家庭の霊性

発題全体の中で特に印象に残ったのは、夫婦の霊性、家庭の霊性に関するものでした。

危機に瀕している現代の家庭に対する教会の役割の中でいま急を要するのは、キリストを中心とした夫婦の再興であるはずなので、教会はこれまで以上に夫婦の霊性、家庭の霊性に重点をおいた司牧的プログラムを提示し、霊性の向上を願う家庭と共に歩いていくべきであるという提言は、この長崎教区に向けられたもののように感じられ、強く反省させられました。

きでしよう。

経済とか育児に関する現実問題や家庭の個々の行動については、教会がかかわることとはまれですし、適切な奉仕もできないと思います。しかし、先ほどの同心円の関係でいえば、教会こそが一番深いところでは家庭とかかわっている、といえるでしょう。

教皇ヨハネ・パウロ二世の使徒的勧告のタイトルは「家庭―愛といのちのきずな」となっていますが、この愛といのちのきずなの源泉として、いわば天上の家庭ともいうべき三位一体の神さまがおられることを思い起こす必要があります。父と子と聖霊という違いを大切にしつつ全く一つとなるという、愛といのちの究極のすがたを掲げることなしに、現代の家庭の問題に取り組むことはできないからです。

もつと分かりやすくいえば、天上の家庭のコピーがわたしたちの地上の家庭であるべきだからです。このような観点から、使徒的勧告は「家庭教会」ということばを使つてこのことを強調しています。

Q. 「家庭教会」とは聞き慣れないことばですね。まだ、よく分からないのですが…

A. 使徒的勧告は、第21番でこう述べています。「キリスト者の家庭は、教会の交わりの特別な啓示であり、実現であります。そのため家庭は、『家庭教会』とも呼ぶこと

もできませんし、また家庭教会と呼ばれるべきです。」そして今回のマニラで開かれた大会の最終声明でも、次のように宣言されています。「最も小さなキリスト者の共同体である『家庭教会』は、全教会の生きた細胞であり、教会内の福音宣教と霊的成長のためにビジョンを与える」ものであると。

「交わり」ということばをキーワードにして考えると、少し分かりやすくなるでしょう。いま現れ出ている社会の矛盾や問題は、その社会の細胞である家庭の中に凝縮された形でひそんでいます。そしてそれらを解決するための力の源泉は、ほんものの「交わり」である三位一体の中にこそあるのです。

ところで、天上の家庭の交わりの地上版は教会であるはずですが、その細胞こそが家庭であるということになります。

Q. 抽象的な教義を説かれてもピンとこないのですが、具体的にどんなことをしたらよいのでしょうか。

A. 具体的方策と具体的ではない方法との、双方を講じていく必要があります。病気の治療には、いま発生している症状のいやしに取り組む対症療法と、具体的ではないがとても大切な体質改善という基本療法とがあるのと同じです。

これもまた、「交わり」をキーワードとして役割分担していく必要があります。たとえば、司祭や修道者が立ち入ることのできない自然な家族計画とかドメスティック・バイオレンス（家庭内暴力）などについてはその筋の専門家が担当し、霊性面では聖職者が、というふうに…

ささやかではありますが、そんな役割分担の方法を、長崎教区では、家庭委員会を中心に、結婚準備講座を開催したりしながら模索しているところです。

Q. 家庭の霊性について、何か一言…

A. では一言だけ…。いまは、「核家族」ということばが何かよくないイメージで語られているようです。しかし、聖家族も核家族でした。その聖家族の形は、親子三人家族の一番核になる形なのです。

核は、核物質でもそうですが、条件によつては核融合し、ぼう大な核エネルギーを秘めています。ですから、核家族はぼう大な愛の核エネルギーの宝庫でもあるはずなのです。この一点を掘り下げてみることは、天上の家庭から流れ出る愛のエネルギーにつながる道であり、家庭の霊性を深めるための大切なポイントになるのではないのでしょうか。



***自分も活用してみたい…**

・「今日の研修会にあずかり、自分の小教区でも役立てたいと思いました。月に1度、小教区で聖書の勉強会をしています。でも、参加者が少ないのです。これからは、みことばの分かち合いを今日のようにしてみたいと思いました。」

・「主催者の方々の熱意が非常に伝わってきました。改めて、信仰生活とは何かと考えさせられました。小共同体についてはこれまで何度か聞いていましたが、このようにみ言葉の分かち合いを繰り返すうちに、やはり、信仰と生活がしっかりと結びついていけるのではないかと思います。自分たちの地区集会や事業所などで、このみ言葉の分かち合いを始めることもできると思いますが。」

・「小共同体というものがよく分かる、大変実りあるものだった。非常に親近感を覚えた。」

普段感じていること、思っていることを素直に話せる雰囲気を感じられた。これを行えば、孤独感はなくなるのではないかと。上(神父様)からの押しつけだけでなく、下(信徒)からの盛り上がりが必要だと感じた。」

・「このような集いが広まることによつて、すばらしい教区ができていくように思います。先ずは、一人ひとりが積極的に動くことから始めていかねば・・・。」

***もっと広めてほしい**

・『小共同体』という言葉をよく耳にしますが、共同体の本当のあり方、その意味がよく分かりました。このような研修会をもっと計画していただきたいと思えます。」

・「実生活と信仰生活との遊離の問題が今までよく取りざたされていきましたので、小共同体

の実践が可能になればスゴイと思います。どのような方法で始めるかを考えるのは、一人ではどうにもなりません。教区として、どのような方法が考えられているのでしょうか。勝手に近所で始めてもよいのでしょうか。」

・「一般信徒がこのような小共同体の祈りにどんどん入っていると、長崎教区も活発になってくるのではないだろうか。最初は本当に入りにくかったが、2回、3回と回を重ねるごとに、暖かいものが自分の中に入っていくさうである。」

・「頭の切り替えが必要だと思います。それには、何よりも祈りの姿勢が必要だと思います。いつでもどこにいても神を意識することのできる生活ができるためには、この祈りの集いを広めていくべきだと思います。小教区でも取り入れていただきたいと思えます。」

・「よく理解できました。今後は、リーダーの養成などにも力を

入れ、問題が発生した時などには常に原点に帰ることができ体制を整えていってほしいと思えます。」

「小共同体」という言葉はすでに教区内のさまざまなところで聞かれ始めてはいますが、それがどういうものなのかをよく理解している人はまだそれほど多くはないと思います。

「よきおとずれ」3月号でも紹介されているとおり、これまでプロジェクト・チームで準備が進められてきた「小共同体づくりのための班長養成用テキスト(案)」についての検討が去る2月の司祭研修会場ですでに行われており、その参加者たちの意向を受けて、これからはさまざまな形で教区内にも少しずつ紹介されていくはずだ。それを教区全体にどういう方法で浸透させていけるかについては、「生涯養成」「宣教」の2つの委員会が、現在検討を重ねているところです。



臍帯血移植による支援

このような苦戦状態の骨髄移植に
とつての頼もしい援軍として期待さ
れるのが、臍帯血移植である。

臍帯血にも造血幹細胞が豊富に含
まれているので、骨髄と同じように
移植用に使える。しかもこれは、提
供者から採取する際に、全く危険を
伴わない。母親にも新生児にも何の
身体上の危険や危害を与える恐れな
しに、採取できる。その上、臍帯血
は輸血に使いやすい。臍帯血は免疫
力が未熟なため許容性が高く、提供
者のHLAが患者のそれと完全に合
わなくても、六つのうち五つまたは
四つが合っていれば、移植用に使え
る。また、保存血液として冷凍保存
しておくので、必要に応じて解凍し
てすぐ利用できる。また、臍帯血の
中に含まれている造血幹細胞は骨髄
の中のそれより増殖能力が高く、細
胞数は少なくてもすむ。

こうして臍帯血移植は、骨髄移植
の不足分を補うものとして大きな
期待がかけられることになる。臍帯
血移植が盛んになることによつて、
さらに多くの病人の生命が救われる。

臍帯血輸血の抱える難点

臍帯血輸血の方にも問題はあ
る。

第一は、一人分の臍の緒と胎盤か
ら採取される量、すなわち採血量が
少ないことである。臍帯血は骨髄液
に比べ、含まれている造血幹細胞は
少ない。体重1キログラムあたりの必要な
血液の細胞数が決まっているので、
大人の患者には大量の臍帯血が必要
となるが、新生児一人分の臍帯血で
は間に合わない。そのため、初めの
ころは、臍帯血は小児患者の治療に
しか役に立たないと考えられていた。
幸いこの問題は改善され、最近では医
療技術の進歩で成人のためにも利用
できるようになってきており、臍帯
血移植総数の約2割を越えている。

第二の問題の方は重大である。日
本では、また組織作りが十分でなく
全国どこにいても病院や自宅で簡単
に臍帯血採取が行える状況にはなっ
ていない、という点である。臍帯血
は出産後すぐ採取して保存場所であ
る公的臍帯血バンクに運ばねばなら
ないが、「日本臍帯血バンクネットワ
ーク」に参加している公的臍帯血バ
ンクは今のところ全国に十カ所で、
これと提携している医療機関でしか
採取できない。そのような病院で出
産せねばならないが、数がいたつて
少ないのである。

ここでは、妊婦が予め臍帯血提供
を申し出、同意書を提出しておけば、
係りが出産直後に臍帯血を採取しバ
ンクに運んでくれる。公的臍帯血バ
ンクでは臍帯血を精密に血液検査し、
安全であることが確認されたものは
登録され、冷凍保存して移植候補者
の現れるのを待つ。

カトリック教会の課題

臍帯血が人の生命を救えるとい
う以上、カトリック教会としても放つ
ては置けない。提供者側は生命の危
険を冒すことなく、ただ提供しよう
という意志と、多少は手間もかかる
手続きをするだけの熱意さえあれば
十分、というのだから、キリスト教
的隣人愛は、この問題についてわれ
われが無関心であることを許さない。
妊婦が子どもを産むとき、その子ど
もに人の生命を救うための奉仕をさ
せるといふのだから、何とすばらし
い、神の祝福を受けた、人生の門出
であろう。

では、教会は何をすべきか。
まず、母親となる女性への積極的
な働きかけである。信者の家庭でも
毎年かなりの数の新生児が誕生して
いる。その上、教会の結婚講座を受

けてから結婚式を挙げる非キリスト
者のカップルも多い。全国にカトリ
ック系女子校は多い。教会の熱意次
第では、かなりの量の臍帯血が人の
生命救助のために提供されることにな
る。

さらに、この問題についての社会
の連帯の輪を作り出す活動も必要で
ある。臍帯血移植は歴史も浅く、あ
まり知られてもいない。誰もがもつ
と容易に病人支援のための提供がで
きるよう、公的臍帯血バンクの数を
増やし、これに協力する採取医療機
関を増やさねばならない。それには、
政府や関係者を動かすための働きか
けや、資金の支援も必要だろう。全
国の公的バンクはどれも経営が大変
だという。

残念ながら、現在長崎県内にはこ
のような病院はないから、教区内の
妊婦には今のところ臍帯血提供は不
可能だが、状況改善は日本のカトリ
ック教会全体にとつての課題として、
われわれも無関心ではおれないので
ある。



「魔法の言葉」



「あなたは侍の子です。町人の子などに負けるはずはありません。」

昔、武士の家では、こんな暗示的な言葉で子どもの躰をしていました。ひ弱な侍の子でも、このような言葉を繰り返し聞けば、「侍は強いんだ。だから自分も強くて優れているんだ」という思い込みが強くなり、いつの間にか、それらしく振る舞えるようになるのです。この暗示的な子育て法は、今でも、十分に価値があるのです。

「お兄ちゃんもお姉ちゃんも成績がいいのに、なんであんただけ悪いんだろうね！」

と、できの悪い子に愚痴る親を見かけます。でも、そう言われてやる気を出す子はそうはいません。賢い親はこんな時、

「お兄ちゃんたちができるのだから、同じ親の子どもの、あんたにもできるはずよ。」

と励ますに違いありません。そう言われた弟は、「自分も、やればできるんだ！」と思えるようになり、やる気も自然と出てくるものです。

このような例は、私たちの回りにいくらでも見ることができます。

4年生のミキちゃんは、友だちとのトラブルの多い子でした。母親は、ミキちゃんにいろいろと注意もしてきましたが、仲間外しなどの意地悪な行為はなかなか直りません。このようなミキちゃんに心を痛めた母親は、担任に相談に来たのです。

担任は、一つの賭けを試みました。連絡帳に次のように書いたのです。

「このごろ、ミキちゃんは友だちにやさしくなりました。うれしいことです。ミキちゃんは、本当はとてもやさしい子です。ほめてあげてください。」

実際は、ミキちゃんの意地悪は少しも変わってはいませんでした。でも、この連絡帳を、ミキちゃんも読むはずでした。ミキちゃんは、この「やさしくなった」という言葉を見たら、「何のことだろう」、「い

つのことだろう」と考えるでしょう。

ミキちゃんは、いつも意地悪ばかりしているわけではありません。ミキちゃんだって、時にはやさしくすることもあります。「このごろ、誰にやさしくしたかな？」と考えることでしょう。そして、「先生は、あのことを言っているのかなあ…」と、思い当たることもあるに違いありません。

さらに、「本当はとてもやさしい子」という担任の言葉に暗示されて、「わたしは本当はやさしい子なのだ」と思うようになるのです。母親だって嬉しいし、ミキちゃんをほめてくれるはずでした。そして、ミキちゃんのやさしい行いは、どんどん多くなっていくはずでした。

担任は、そこに賭けてみたのです。

ミキちゃんは変わりました。表情は日に日に柔らかくなり、言葉までもがやさしくなっていました。そして、普通の明るい人なつつこい女の子に戻るのに、大した時間はかかりませんでした。担任は、言葉の持つ力に、今さらながら驚かされました。

後日「担任の賭け」の話を聞かされた母親は、「最初の、「やさしくなった」という先生の言葉には半信半疑でした。でも、「本当は、とてもやさしい子です」という言葉にはハッとさせられました。ミキの幼い頃を思い出してみると、ミキは間違いなくやさしい子でした。私はいつの間にか、ミキの意地悪な面だけが気になって、やさしいミキのことを、すっかり忘れていました。『あんたはどうして意地悪な子なの!』と、いつも叱ってばかりいました。今考えると、『ミキは意地悪な子なんだ』という悪い暗示をミキに繰り返し与えていたんですね！今は、あの時の連絡帳の言葉が、魔法の言葉のように思えてきます。」

と自責の念を込めて語ってくれました。

そうです。暗示は、子どもを良くも悪くも変える「魔法の言葉」なのです。

(にしむら よしを)



家庭委員会

現代社会の憂慮すべき問題のほとんどは、家庭と何らかのかかわりを持ち、その問題の根本的な原因の多くは、家庭にある。家庭崩壊が叫ばれる今日、家庭委員会が寄与すべき課題は多い。

現在家庭委員会は、2名の信徒、2名の修道女、8名の司祭委員で構成され、3カ月に一度の割合で会合を持っている。以下、家庭委員会が取り組んでいる事項を紹介したい。

(1) 結婚講座

しあわせな結婚・家庭生活の準備のための講座で、年2回、2月と9月に開催。各回、全8単元の構成。回によって変動はあるが、受講者はおよそ30組・60人程度。そのうち、信徒の受講者は3割程度。信徒同士の結婚は1組か2組。

結婚準備講座としては内容、回数とも十分とは言えない面があるが、受講者の感想では貴重な体験となっているようだ。十数名の信徒のスタッフや協力者に支えられながら行われてきている。

(2) マリッジ・エンカウンター

夫婦が相互の関わりを見つめ直し、家庭をより豊かに育むことをめざす集い。毎年6月に開催。2泊3日の日程。長崎黙想の家を会場に行われている。今年は6月20日〜22日に開催予定。参加

お父さんに
賛成の人？



者不足が毎回の難題である。家庭の危機が叫ばれる中で、夫婦相互の関わり、交わりを新たに見つめ直すことができるし、家族全員にとってもこの上ない恵みのときになつていようである。多くの夫婦の参加を期待している。

(3) 「生命と家庭」セミナー

家庭委員会の中で提案され、昨年度から始められた。昨年は一日半の研修であったが、今年は一日の日程で7月開催を予定している。自然な家族計画（ビルディング・メソッド）を中心にして、生命の尊厳、夫婦の霊性、などを盛り込んでいる。

昨年は参加者が少なかったため、今年は若いお母さん方に呼びかけ、若い家庭のサポートができればと考えている。

(4) 「現代家庭の諸問題を考える」集い

現在家庭で起こっている諸問題について考える講演会か、ネル・デイスカッション形式の集いを開いてはどうか、との意見が委員会内で出されている。各種団体、施設など、家庭問題に日夜取り組んでいる現場の方々の生の声を聞き、家庭崩壊の原因、家庭本来のあり方、支援のあり方など、現実に即した事例を学び合う形について、現在協議中である。今年度中の開催を目標としている。

小話 「依存症」

信徒

「神父さまが先頭に立つてく
だされば、私たちががんばる
ことができるんですけど…。」

神父

「司教さまがビジョンを示し
てご指導くだされば、わたし
たちは張り切つてやります。」

司教

「ローマが…。」

天使

「神さま、どうかこのどうし
ようもない依存症患者たちに、
いやしの恵みをー。」

天の声「人間たちががんばってくれ
れば、恵みを与えることがで
きるのだが…。」

天使 「えーっ！ 神さまも、
インビジョン？」



いっさ